私にとってのバリアフリー

中　二

人権について考えるとき、私は必ず弟のことが頭に思い浮かびます。

弟は、目に先天性の障害があり、生まれたときからたくさん大変なことがありました。もちろん、弟から学ぶこともたくさんありました。そして最近、また新たに弟のおかげで気付き、考えたことがあります。

それは、バリアフリーについてです。

私の弟は普段学校で、歩行指導を受けています。歩行指導とは、点字ブロックや目印を頼りに目的地まで歩く練習のことです。しかし新型コロナウイルス感染症の影響で学校が休校になり、歩行指導が受けられなくなってしまいました。そこで、担任の先生から、駅までの行きやすい道のりや目印を探すという宿題が出たそうです。弟は白杖（はくじょう）を持ち、母と出かけて行きました。

帰ってきた弟は、電車の発着音や走行音、発車メロディが聞けてとても楽しそうでした。

しかし、一緒に行ってきた母は、

「駅のすぐ近くになるまで点字ブロックが無く、音響装置付信号機や目印になるようなものも無い。道の段差や駅の急な階段もあったので、一人で歩くのは難しそう。」

と不安そうでした。

確かに、駅や大きな店舗、病院の周りでしか点字ブロックや音響装置付信号機は見ない気がします。

弟は点字ブロックや音響装置付信号機が増えるだけで一気に歩きやすくなります。そしてそれは、視覚障害者のためだけにあると思われていますが、点字ブロックは駅のホームの「黄色い線」として、音響装置付信号機は小さな子供の目印などとして、みんなの役に立っています。また、道の凹凸や小さな段差も無くせば、これも視覚障害者だけではなく車いすに乗っている方やベビーカーを押している方、お年寄りの方など、たくさんの方がより通行しやすくなると思いました。

このことから、ちょっとした工夫や、一つ何かが変わることで、たくさんの人が過ごしやすくなることもあるということが分かりました。「誰か

特定の人のためだけに」と思うと難しいことでも、視野を広げ、「それはたくさんの人のためになることかもしれない」と思うことで、行動を起こしやすくなるのではないかと感じました。これは私にとってのバリアフリーに対する新しい答えになったと思います。

弟の学校では、点字ブロックの上に物を置かないように呼びかけるプロジェクトがあります。学校の近くの大きな駅の前で、のぼりなどを持って呼びかける活動を行っているそうです。それによって、視覚障害者だけでなくさまざまな人が通行しやすい環境を作ることにつながっています。そのような取り組みが私たちにもできるはずです。道端にゴミを捨ててはいけないし、落ちていたら率先して拾います。登下校中は道いっぱいに広がって歩いていては危険です。それは大きな事故にもつながります。

私たちにできることは小さなことかもしれませんが、それが障害のある方だけでなく、自分たちのためにもなります。難しいことではなく、「ちょっとした心がけと思いやり」を多くの人がもつことが大切なのではないでしょうか。これならば今の私にも行動に移すことができ、社会のために生かせると考えました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、濃厚接触を避けなければならないので、弟や弟のような人たちはとても生活しづらくなっています。こんなときだからこそ、差別や偏見の考えは捨てて全員が協力し、一日も早く日常が戻ってきて欲しいです。

そして二〇二一年、東京オリンピックが開催されたら、競技だけではなく過ごしやすい国として、訪れたどこの国の人にも胸を張れるようになってほしいです。また、東京から日本全国、日本から世界へとバリアフリーの考えが広まって、すべての人が平等に快適に生きていける世界が実現してほしいと思いました。

私にいろいろなことを気付かせてくれる弟にはとても感謝しています。誰かのための行動はためらわず、これからも、弟と一緒にたくさんのことを学んでいきたいです。